

映画 と 『時代を撃て ・多喜二』

プロレタリア文学を代表する小林多喜二の生涯を描いた映画『時代を撃て・多喜二』が公開された。監督の池田博穂氏は、『東京大空襲』（平成5年）、『犬張子』（平成8年）、『憲法』（平成16年）で監督・脚本をつとめた人物であり、かつては、この映画で脚本を担当する橋祐典氏が監督した名作『ガラスのうさぎ』（昭和54年）で助監督をつとめている。映画は、多喜二を知る人の証言、研究者や文学者のインタビュー、資料、当時の映像、作品朗読からなるドキュメンタリーである。

現在、わが国では、資本主義の巨大な発達とマスメディアなどの操作を通じて、強力な支配システムが構築されている。有事立法、自衛隊のイラク派兵、憲法改正という一連の動きは、多喜二が生きたころの閉塞の時代を思わせるであろう。没後70年を過ぎ、多喜二への思いが全国的に高まるなか、この映画が製作された目的は、自由と平等を求めて闘った多喜二に向き合い、見失いがちな原点を再確認するとともに、社会正義を目指すことの素晴らしさを多くの若者たちと共有する点にあるという。

映画には、多喜二が幼年期から青年期をすごした小樽も登場する。日本がファシズムに突き進もうとしていた昭和初期、非合法であった日本共産党の組織と党員をあぶりだすため、特別高等警察は残忍な拷問を繰り返していた。1928年3月15日、全国で1,600名の党員と支持者が検挙されたとき、小樽では約500名が検挙され、そのなかには多喜二に科学的社会主義を実践的・理論的に指導した先輩たちも含まれていた。この「三・一五事件」を生々しく描いたのが、多喜二がみずから処女作と呼ぶ『一九二八・三・一五』である。

多喜二は、幼年期から青年期をすごした小樽で、すぐれた仲間とあたたかい家庭にめぐまれ、芸術を愛し、文豪の作品を読みふける文学青年だった。多喜二が入学した当時の小樽高商は、自由主義的な学風で、マルクスに造詣の深い教師が多く、友人たちは社会科学研究会を結成し勉強していた。映画では、多喜二が何かと相談し教示を受けた「経済原論」担当教官の大熊信行や、「民法概論」担当教官の夏堀悌二郎（小樽地方裁判所判事）との交流が描かれる。夏堀の授業中、多喜二が「今の民法や刑法では基本的人権を守る点で不備なのではないですか」と尋ねると、夏堀は次のように応えた



「時代を撃て・多喜二」のポスター

監督の池田博穂氏



「正直言って満足すべきものではないと思っている。たとえば自白が証拠の王様だという考えがある限り拷問はなくなる。拷問が自白を強制し、その自白が拷問を正当化するという図式は、私はなくすべきだと考えている。すると多喜二は、「先生はかなりリベラル派の判事さんですね」と言ったという。池田監督は、電話によるインタビューで、小樽高商が多喜二の人生に与えた影響について次のように語る「小樽高商時代の多喜二の青春は、友人たちとの交友関係を考えても、とても充実したものだったのでしょうか。1学年下の伊藤整は、図書館で本を手にとると、ほとんどの本に多喜二が読んだ痕跡がみとめられて愕然としたというが、わたしも小樽商科大学に出向き、図書館の蔵書にある多喜二の書き込みを見て、小樽高商が多喜二に対して大きな影響を与えたのだらうと感じました。」

多喜二の自由と平等を求める姿勢は、私生活における恋の場面にもみとめられる。生涯の恋人であった田口タキは、身を売られ非人間的な境遇にある酌婦であったが、多喜二は借金をしボーナスをはたいて彼女を救い出す。多喜二の育った小樽の環境は、自然に社会変革の理論と運動にむすびついていた。彼にとって、タキを幸せにすることと世の中の不平等をなくすことは密接に関係していたのである。

多喜二の両親と池田監督は同じ秋田県の出身であるが、監督にはそのことに対する思いもあるという「革命家になりがちだが、多喜二はひょうきんで茶目っ気があります。この明るさは、秋田音頭やドンパン節に代表される県民性のあるわけなのではないかと思っています。」人間の尊厳を冒すものに対する怒りを小説に描き、特別高等警察と生死をかけて闘いながらも茶目っ気を失わなかった多喜二のみずみずしい青春は、映画を観る者を感動させずにおかない。

（羽村 貴史）